

事例発表①

「中国の学校教育段階における英語言語教育：CEFR の影響について」

Han Baocheng (北京外国語大学外国語言語研究所副所長、教授)

はじめに、背景として、中国の学校における英語教育について触れ、そして、英語教育のためのナショナル・カリキュラム・スタンダードについて話をします。そして、Can-Do ディスクリプタの具体的な例を提示します。また、入学試験の改革と英語の熟達度に関する枠組みの開発に関わる現在進行中のプロジェクトについても紹介する。

中国では英語教育は小学校から始まる。いくつかの幼稚園でも英語が教えられているが、必修ではない。英語が必修となるのは小学校からである。義務教育は小学校の6年間と中学校の3年間であり、この9年間において必修として英語を学習することになる。高校に進学した場合、英語は必修であり、また同様に、大学や大学院でも英語は必修科目となっている。

2001年にすべての教科のカリキュラム変革がなされた。それに伴い、小学校での英語が必修となった。それまでは都市部の生徒たちは英語を学習していたが、英語を教えられない先生がいない地域もあり、必修ではなかった。2001年の改革において、教育省は New English Curriculum Standards (NECS) を発行した。CEFR は枠組みであるが、NECS はスタンダードであるため、その意味では CEFR とは異なる。ただし、教授・学習・評価にわたって様々な情報が組み込まれている点においては CEFR に類似している。NECS には、新しい英語教育の方向性として、タスク型のアプローチや総括的そして形成的評価の方法などが具体例とともにこの基準に組み込まれている。NECS の開発にあたっては CEFR を参考にし、他のスタンダードも参照した。NECS の1つ目の原則は、言語はコミュニケーションの道具であるだけでなく、思考、学習、社会化のための道具であるというものである。そして2つ目は、外国語学習は生徒の総合的な成長と不可分なものであるというものである。これは、外国語を学習することは、その外国語を使えるようになることだけではなく、外国語を通して様々な種類の情報を取り扱うことで人間形成に役立つという考え方である。3つ目の原則は、言語学習は、生徒の情緒的要素が十分に考慮された場合に最も効果的になるというものである。外国語学習の前提として生徒に高い動機づけがあることが大切である。4つ目は、学習方略を言語教育カリキュラムに組み込むべきであるというものである。言語それ自体を学ぶことと同時に、学習方略を学ぶことでその言語の力を向上させることができる。5つ目の原則は、総括的評価と形成的評価の両方を導入すべきであるということである。特に、形成的評価を重要視することが必要である。これらの原理は CEFR の原理とかなり類似していると言える。

次に新課程の編成について話をします。英語の学習は、都市部については小学校1年生から開始されるが、その他の地域は小学校3年生からの開始となり、週に2～3時間の実施となる。中学校では5時間、高校では週4～5時間程度である。英語の習熟度を測るために、NECS に組み込まれている9レベルからなる尺度を採用しているが、どのレベルを達成目標とするのかについては、学校に任されている。また、高校では、まず最初の2年間で学ぶべき必修のモジュールが設定されており、2年生からは選択式のモジュールが導入されており、英文学、実践的ライティング、ビジネス英語などから選択をすることができる。

CEFR では6レベルが設定されているが、NECS では9レベルが設定されている。達成目標は各学校の裁量となるが、必要とされるレベルは、小学校ではレベル2、中学校ではレベル5、高校ではレベル7となっている。8と9に関しては、ハイレベルな高校が到達目標にするためのものである。

CEFR にも多くの領域が見られるが、NECS では 5 つの基準要素が設定されている。1 つ目は、リスニング、スピーキング、リーディング、ライティングという 4 技能についての言語スキル、2 つ目は、発音、語彙、文法、機能、トピックに関する言語の知識、3 つ目は、動機、興味、自信、協力、愛国心、国際視野についての感情と態度、4 つ目は、認知、計画、コミュニケーション、学習資源の活用にそれぞれ関わる学習方略、そして 5 つ目は、文化知識や異文化能力などに関わる文化意識である。これらのすべての 5 つの領域について、NECS には Can-do ディスクリプタが組み込まれている。それぞれのベンチマークでは、学習者が何を達成すべきかが強調されている。例えば、最初の言語スキルのレベル 1 では、サブスキルとして、Listening and doing や Speaking and singing などが設定されているが、これはこのレベルの学習者は初期学習者であることから、通常の 4 技能の観点ではなく、タスク型のアプローチから考えた場合、このような技能設定が自然である。レベル 5 は中学校の必修到達レベルであるが、ここではリスニング、スピーキング、リーディング、ライティングという 4 技能の観点から Can-Do 型の記述がなされている。例えば、リスニングでは Can understand conversation concerning familiar topics and Can collect information and ideas from the dialogue のような記述が設定されている。しかしながら、これらの記述は抽象的過ぎるという批判を教師から受けている。Can understand が何を意味するのか、あるいは familiar topics とは具体的にどのようなトピックなのかは提示されていない。この点は、Can-Do ディスクリプタを実際に活用する際の問題点となる。

次に、新しい学習方法と指導方法について提示する。NECS は CEFR で用いられているアプローチに類似している。NECS は、過程を重視した学習者中心型の学習方法および指導方法を提唱している。さらに、NECS では、タスクベースのアプローチを奨励しており、実際の教科書にも多くのタスクが掲載されている。また、教室での指導に、学習方略をどう開発していくかについての点も組み込むことが求められている。そして、NECS では、生徒に対して学習への前向きな感情を持つことの意義を強調している。

ここで、NECS と CEFR の類似点と相違点について論じる。NECS で統合的な言語使用の能力と呼んでいるものは、CEFR で示されているコミュニケーション能力とほぼ同じことであると考えられる。NECS で統合的な言語使用の能力とは、先に述べた 5 つの領域である言語スキル、言語の知識、感情と態度、学習方略、文化意識がすべて統合的に組み込まれた能力と考えることができる。熟達度のレベルに関しては、CEFR は 6 レベルを設定しており、NECS は 9 レベルを設定しているが、NECS の 9 レベルの中には CEFR の最上位の C レベルに該当するであろうレベルは組み込まれていない。小学校で必要とされるレベルは NECS ではレベル 2 になるが、これは CEFR の A1 レベル、同様に、中学での到達必要レベルの 5 は、CEFR の B1- (B1 マイナス) に該当し、高校で必要とされるレベル 7 は B1+ (B1 プラス) となっている。ただし、これまで CEFR と NECS の該当レベルの整合性についての研究は未実施である。NECS と CEFR の別の共通点は両者とも Can-Do の形式で達成目標が記述されていることである。また、CEFR で提唱されている行動志向型のアプローチは、NECS でのタスクベースのアプローチと同じであると考えられる。中国の英語教育では、総括的評価から形成的評価へ評価方法が移行することが大切である。これまで大学入試の影響で総括的評価が多く行なわれてきており、この新しいスタンダードを活用していくことにおいては課題も多くある。そこで、大学入試改革に関わるいくつかのプロジェクトが現在進行中である。

新世代型の大学入試が必要となっていており、そのためのプロジェクトが実施されている。言語能力の新しい構成要素を定義しており、言語能力を個別的要素 (discrete-point) という伝統的な捉え方をするのはなく、言語能力を統合型の能力として捉えている。その結果、タスクベースのアプローチを推し進めることになり、統合型のタスクを見据えたテスト開発が行われることになる。

もう1つのプロジェクトは、National English Proficiency Scales (NEPS) に関するものである。この尺度を用いて、中国人英語学習者の習熟度を共通の基準で測定する。また、中国全土の英語教育に一貫性を持たせることができる。NEPS は、初等、中等、高等のどの段階の英語教育においても、学習の目標を具体的に定めるために活用することができる。さらに、教育機関の相互のコミュニケーションを促進し、教育制度の透明化と一貫性を高めることもできる。この尺度の開発の原理は、「言語能力とは、意味を構築したり理解する能力である。それは情報あるいは意味を理解する能力と表現する能力から成り立っている。これらの能力はそれぞれ下位能力に分類され、それによって、言語能力記述文を蓄積するための枠組みが提供される」というものである。

中国では、学校の英語教育が急速に発展している。約2億人の生徒が今学校で英語を学習している。NECS は10年間にわたり試行されたが、それを全土に広げていくのは難しいことである。なぜなら、能力の高い教員が不足しているからである。そのため、さまざまな教育機関により、教員の養成と研修を進める取り組みが行われているが、大規模なクラスサイズ、教員の過度な負担、そして試験の制度などに課題は残されている。

中国の英語教員は新カリキュラムに非常に協力的であり、優秀な教員は、これまでの伝統的な役割と新しい役割を融合させ、旧来の手法に新しい手法を取り入れている。つまり、改革というより進化を見せている。そこでは、教員による学習者中心でタスクベースのアプローチの再概念化が行われている。このような新しい取り組みは、教員、教員を養成する者、教育行政担当者、研究者、地域社会や保護者など、すべて関わる人々の間の協力によって可能なものになる。